



現代の文学 = 19

石川達三集



僕たちの失敗
四十八歳の抵抗
結婚の生態

河出書房新社

13A 3209909X

現代の文学 19 石川達三集



© 1963

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和38年11月1日 初版印刷
昭和38年11月5日 初版発行

定価 390円

著者 石川達三
発行者 河出孝雄
印刷者 高橋武夫
装幀 原弘(N. D. C)

印刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函貼・神崎製紙(ミラーコート)
同納入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京(291) 3721~7
振替口座東京 10802

製本・加藤製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

僕たちの失敗 三

四十八歳の抵抗 三七

結婚の生態 四三

年譜 五九

解説 山本健吉 五五

挿画 田代光
写真 三木淳

石川達三集

僕たちの失敗

結婚について

結婚ということについて、僕は懷疑的だった。懷疑的ではあったが、否定的ではなかった。結婚は、否定するわけには行かない。否定したら人類は絶滅するし、第一、人生がおもしろくない。ただ、どういうかたちで結婚するか、どんなかたちの結婚生活が現代の僕たちに最もふさわしいか。そのことにはいろいろ問題がある。僕はその事で悩んでいた。しかしそういう悩みは、あまり苦しいものではなかった。

僕は伊吹まさ子を愛していた。愛していたということには原因もなにも無い。好きになったから好きになっただけのことだった。僕は恋愛が神聖だなどと思ったことは一度もない。むかしの詩人は恋愛を美化することが好きであつたらしいが、僕はなにも恋愛を美化しなくてはならないとは思わない。恋愛は本能から出発した感情で

あるのだから、動物的だ。恋愛が神聖だと言うのなら、鳥やけだものの行為もみな神聖だということになる。僕はそういう風にひねくつたり美化したりごま化したりしたくない。在るがままの自然な姿で恋愛を考えて行きたいと思つていた。

しかし僕は伊吹まさ子を愛したことによつて、まさ子を実際以上に買いかぶつたり、理想の女性、完璧な女性みたいに幻想したりしたことが、無かつたとは云えない。まさ子はすこし背丈がひくかつたが、僕は、そのくらいがちょうど可愛い背丈だという気がした。僕よりも大きいような女は女みたいな気がしない。それから、まさ子はすこし気が強くて我儘なところがあつた。僕はそれを、まさ子が惻口なせいだと考えていた。そんなことはどう考えようと僕の勝手で、誰に迷惑がかかることでもない。他人に迷惑のかからない事ならば、僕は何をしてもいいと思つていた。

僕はあるとき、仲間の稲垣次郎にむかつて、結婚ということについて懷疑的になつてゐることを話してみた。すると稲垣はひやかすような笑い方をして、こう言つた。「馬鹿だなあ福田。結婚というものは二人でするものなんだよ。お前がひとりで懷疑的になつてゐたって、相手がどう思つてゐるかかわからんじゃないか。」

お前の相手は伊吹まさ子だろう。あれは個性的で惻口

な子だ。俺なんか、とてもじゃないが身がもてないよ。

お前は大学出だからいいかも知れんが、向うはどうなんだい。やっぱり懷疑的か。二人で懷疑的になつていたんじゃ、結婚はだめだな」

なるほどそうだ、と僕は思った。僕は懷疑的になつてはいたが否定的ではなかった。本当は何とか合理的な、納得できるような形式と方法を発見して、結婚したかった。結婚ということはぜひぶん楽しいことに違いないと思つていた。しかし結婚の失敗ということも無数に実例がある。失敗したらどうするか。僕は要心ぶかい性質であつたから、先の先まで考えてみるのだった。しかしいくら要心ぶかく考えていても、失敗することは必ず有る。失業、病氣、経済不況、災難、戦争。僕の力でそのすべてを防ぎ止めることなどは、とうてい不可能だ。

僕は稲垣次郎の忠告にしたがつてみようと思つた。つまり、ひとりで懷疑的になつて居たつて結着はつかないから、二人ではなしあつて見ることにした。それで、二人の意見がまるで違つていて、妥協の余地がないものとわかれば、僕の恋愛はそこであきらめるべきだと思つた。

恋愛というものはそういうものであるべきだ。二人のあいだに妥協の道がなければ、その恋愛は整理してしまふべきだ。そして他にあたらしい対象をもとめるべき

だ。要するに恋愛というものは一つの過程であり手段であつて、それ自身が目的ではないのだから、結婚の可能性がまったくないときには、恋愛だけにこだわっているのは愚劣だと僕は思った。だから、早く伊吹まさ子と話し合つてみて、可能性があるならば局面を進展させる、可能性がなければ彼女の幸福を祈つて、握手をして別れる。それが一番手つとり早い方法だと考えた。

そこで僕は或る日、工場が引ける前に係長にきいてみた。

「今日は残業、ありますか」

「無いよ」

「全部無いんですか」

「経理が残業だと思ふ。決算期だからな」

「女工は無いですか」

「無いよ。何だつてそんなことを訊くんのだ」

僕は終業と同時に手を洗つて飛び出した。女子工員は着物を着かえたり化粧をなおしたりするから、必ず十分ぐらい遅れる。僕はオートバイを曳き出して工場の出口にまわつた。そして、そのあたりを小さく旋回しながら待つていた。女たちがぞろぞろと出てくる。

「福田さん乗せて……」と組立部の女工が言う。

「だめだよ。人を待つてゐるんだ」

「知つてゐるわ。伊吹さんでしょう」

「うるさいな。早く帰れよ」

女の子は憎たれ口をきいて、行ってしまう。僕は良い気持だった。僕は、もしも伊吹まさ子にことわられたらどうするか……そんなことは考えていなかった。ことわられることも当然ある筈だ。彼女に愛人があるかも知れない。また健康上の理由もあるかも知れない。僕はそんなことを一切考えていなかった。

ことわられたら問題は白紙にかえる。僕は伊吹まさ子を愛しているという事実だけが残るが、これも白紙に返すべきだ。そういう風に自分の心の整理をつけるべきだ。(整理がつかなかったらどうするか。どうしても思い切れない。整理してしまえばいいのだ。……そんな事は僕は考えていなかった。整理してしまえばいいのだ。)

やがて伊吹まさ子が友だちといっしょに出て来た。短いダスターコートの下に緑色のチェックのスカートをはいている。しゃれた姿だ。僕を見つけて少し笑った。僕はただ単純にうれしくなった。僕は恋愛がはずかしい事だとは思っていない。だから誰かに知られたくないという気持もっていない。僕の父ぐらいの年齢の人たちは、恋愛を神聖だと思っていたらしい。そのくせ恋愛をはずかしがっていた。矛盾したはなしだ。僕はハンドルを廻して伊吹まさ子の眼のまえに車を持って行った。

「伊吹さん、乗らないか」

伊吹まさ子は一瞬、立ちすくんだような格好だった。

急には返事ができなかったらしい。すると一緒に歩いていた仲間の女工たちが口々に、あぶないからだめだとか、男の誘惑に乗ってはいけなとか、やかましくしゃべり立てた。おしゃべりの全部は、乗ることに反対の意見だった。つまり全部の女たちが一斉に軽い嫉妬を感じていたのだ。しかし、そのために却って伊吹まさ子は決心がきまつたらしかった。

「どこまで乗せて下さるの？」と彼女は言った。

「君のうちまで送ってあげるよ」

「大丈夫かしら」

「大丈夫だよ。殺しやしないよ」

まさ子は黙ってオートバイのうしろの、小さな席になめに腰をかけた。女たちがまた騒いだ。僕は走り出した。工場の門から道路にあふれだした何百人という男工女工の群を左右にかき分けて、僕は快適に走った。

「しっかりとまって居るんだよ」と僕は言った。「僕のベルトにつかまるんだよ」

まさ子は僕の腰のうしろのところのベルトに手を入れた。僕は走りながら、ベルトにつかまっている彼女の手を愛していた。僕はまだ一度もその手に触れたことは無かった。一人のときと違って車は重かった。その目方がまさ子だった。僕はその目方を愛していた。僕は何とな



く、もはや伊吹まさ子は赤の他人ではないような気になっていた。僕のオートバイが、まるで花で飾られた二人の結婚の馬車みたいだった。

三分ばかりも僕は黙って走った。何か言いたかったが、どういう言い方をしたらいいのか見当がつかなかった。そのとき伊吹まさ子がうしろから僕に声をかけた。

「福田さん私に何か、用があったの？」

ああ惻口な女だ、と僕は思った。僕がなにも言わないうちに彼女はちゃんと察していたのだ。そして、僕が言い出し兼ねていることを知って、向うから発言の機会を与えてくれたのだ。僕は急に元気づいて言った。

「そうなんだ、用があるんだよ。折人ってな、相談したいことがあるんだ」

今度はまさ子は黙っていた。黙っているのがつましきだった。黙っていることが、僕の言いたいことの内容を知っている証拠だった。同時にまた、いつでも拒否することができるように、一歩しりぞいて相手の様子を見ようとする、女らしく要心ぶかい態度でもあった。

「実を言うとな、伊吹さん……」と僕は大きな声で言った。大きな声でないで、うしろの人には聞えにくいからね……僕は君と結婚したいと思っているんだよ。だからさ、一つ考えてみてくれないか」

オートバイは四十五キロの速力だった。広い道路の街路樹のみどりが流れるようにうしろに走っていた。伊吹まさ子はだまっていた。しかし彼女の両手はしっかりと僕のベルトにつかまっていた。僕はもう一度声をかけた。

「ねえ伊吹さん、考えてみてくれないか」

「考えてみるわ」と彼女は言った。「でもわたし、福田さんのこと、なんにも知らないのよ」

僕はふつとかなしい気持になった。(福田さんのこと、なんにも知らないのよ)というまさ子の言い方が、とても純真で、可愛かった。

「知らなくたっていいんだ。段々に解ってくるさ」と僕は言った。「僕だって君のことを、たくさん知っているわけじゃないよ。だけどね、お互いに好きならそれでいいと思うんだ」

恋愛というものは、おたがいによく知っているから愛するというわけのものではないと思う。好きになる動機などは、きつと単純なものだ。好きになってから相手を知りたくなる。それからたくさんさんの知識をむさぼる。そして、知れば知るほど好きになって行く。何だって良い方にばかり解釈してしまふからだ。つまり、自分勝手にまちがった解釈をする。そのまちがいは、結婚してから徐々に姿をあらわして来る。だまされていたような気がする。だから恋愛結婚というものは、案外に命がみじか

い。

みじかくてもいいじゃないかと僕は思った。みじかくても、その間に充分に楽しい時間があるに違いない。一生つづいた結婚が必ずしも立派で理想的であるとは限らない。僕はみじかくてもいいから楽しい結婚生活をもちたかった。

要するに恋愛というものを、僕はあまり信じてはいなかった。日本中に女は何千万人も居るのだ。偶然にそのなかの一人を発見した男は、これが自分の理想の女性だと信じてしまふ。信じるだけの根拠がどこにあるかという、どこにもない。理論的には有り得ないようなことを、恋愛する人はかんたんに信じてしまふ。そして、眼が美しいとか、声がきれいだとか、笑顔がたまらないとか、愚にもつかない理由をならべ立てる。ところがそんなものは日常生活とは根本的には何の関係もない、アクセサリーにすぎないのだ。

そんなことは解っている。わかっているくせに、僕は財布のなかの最後のおかねで、米を買おうとはしないでカーネーションを買うようなことをしてしまふのだ。僕たちの年齢では、時として、米の飯よりも花の方がほしいこともあった。そういう不合理が美しいのだ。僕は不合理の魅力に曳かれて、伊吹まさ子を愛していた。いつまで続くかは知らないけれども、僕は彼女に溺

れてゆきたかった。もつと本当のことを言えば、彼女に溺れてゆくところまで、自分を溺れさせてやりたかった。

「オー、ストップで止ったとき、僕はふり向いて言った。

「オートバイ、好きかい？」

まさ子はほのかに笑つて、うんとうなずいた。子供みたいな返事の仕方だった。荒々しい風に吹かれて、彼女の頬は赤くなっていた。まつ毛の長い、きれいな眼をしていた。

「君のうちに、何か飲むもの、有るかい」

「番茶だけしか無いわ」

「番茶、ごちそうしてくれるかい」

「ええ……だけど、私のうち、男の人なんか来たこと無いのよ」

「いいじゃないか。番茶飲んだらすぐ帰るよ」と僕は言つた。

「その郵便局のところを左へまがるの」とまさ子はうしろから言った。「曲つてから左側の、五軒目」

伊吹まさ子は小さな木造アパートに住んでいた。六畳に台所がついただけの貧しい部屋だった。僕は部屋のなかをじろじろ見まわした。彼女はガスで湯をわかし、僕のために番茶をいれてくれた。それから黒砂糖の飴を出してくれた。

僕の下宿とちがつて女の部屋というのは、ひとりきりでも一応は家庭のかたちをしているものらしかった。

ここに僕が坐つて居れば、もう新しい家庭とおなじことだった。して見ると、家庭というものは女が造るものらしいと僕は思った。女と子供とを入れて置く場所が家庭であつて、男なんか本当はどうでもいいらしい。

工場で見るときの伊吹まさ子は、たくさんの研磨機研磨機にとりかこまれて、忙しそうに立ちはたらいで居る。しかし機械と彼女とは関係がない。彼女は孤独だ。終業時間かくると機械はとまる。彼女は帰り支度をする。それで終りだ。一生おなじ職場ではたらいににしても、機械は機械、女工は女工。彼女はどこまでも孤独だった。

しかしいま、この部屋の中で見ると伊吹まさ子は、まるで違つていた。茶道具も机も鏡台もカアテンも、彼女のものであり、彼女の付属物であり、血が通つていた。彼女が留守のときでもこれらの家具はやはり彼女のものであり、彼女の匂いをふくんでいるだろう。そして、それらの家具にとりかこまれて坐つているとき、伊吹まさ子は女らしく、落ちついていた。女というものは、身のまわりの沢山の道具類や衣類にとりかこまれているときに、一番完全に女であるらしいと僕は思った。僕はそういう生き生きとした彼女の姿を見て、すこし彼女を理解したような気がした。

「ほんとに、まじめな話なの？」とまさ子は伏目になつて言った。

「僕はまじめだよ。だから一つ、具体的に相談して見ようじゃないか。事務的なことから言うと、第一に僕は、誰もほかに婚約もしていないし、恋愛関係もないんだ。君は誰か特別にしたいとか、約束をしたとか、そういう人が有るか？」

「手紙をくれた人なら有るわ」

「ひとり？」

「三人ぐらい。でも返事は出してないの。何も無いと同じよ」

「過去に於ては？」

「何も無いわ」

僕はそれから二人の健康状態について話しあい、何の故障もないことを確かめた。次に、僕の職業について、まさ子の方に不満とか註文とかが有るかどうかを確かめた。

「僕はあまり出世はしないよ。係長までなら確かだが、部長まではどうか？」

「そんなことは、別に何でも無いわ」とまさ子は言った。

その次に僕は二人の収入をたしかめてみた。僕は毎月二万三千円から四千円。残業によつて多少の変動がある。伊吹まさ子は一万五千円見当だった。

「すると二人で三万八千円か九千円だ。ゆっくり暮せるな」

「そうね……」まさ子は気乗りのしない様子だった。

それから彼女は変なことを言った。

「福田さんは大学出だって誰か言っていましたけど、本当ですか」

「ああ、本当だよ」

「それじゃ、駄目だわ」とまさ子は小さな声で言った。

「あなたはどんどん出世して、工場長になったり重役になったりするでしょう。私は高校の中途で、学問も教養もないから、その時になったら、あなたに棄てられるわ」

「ばかな事を言うんじゃないよ。僕はただの職工じゃないか。それに、万一重役になったにしても、それは三十年も先のはなしだろう。それまで君は生きてるかどうかも解らんじゃないか。もしも戦争がおれば、原爆でもって日本が全部ふっ飛んでしまうかも知れないんだ。そんな、先の先のことを心配して、そのために現在の幸福を棄てるという法があるかい」

「そうね」とまさ子は言った。「いいわ。福田さんが重役になったら、棄てられてもかまわないわ。わたし、煙草屋か駄菓子屋の店でもひらいて、何とか暮して行きま

す。男の人なんて、頼りにならないもの……」

く行かなくなったら仕方がないんだから、巧く行くあいだだけでも楽しい家庭を持てばいいと思うんだ。そうじゃないか」

まさ子は黙ってうなずいた。

僕は大学の法科を卒業した。なまけものの学生であつたから、法律家にもなれないし外交官にもなれなかった。だから平凡な役人になるのが一番いいと思つた。役人は特別な落度がないかぎり、停年までは首を切られることがない。ベース・アップ要求のストライキのときなどは、知らん顔をして居れば、なまけ半分勤めていても何とかやって行けるだろう。そこで法務省の試験をうけてうまい具合に合格し、官庁づとめをはじめた。

それが僕の第一の失敗だった。役人というのは首を切られることが無いかわりに、無数の規則や法律にしばられてゐるのだつた。その規則や法律におとなしく縛られた人間だけが停年まで月給をもらえろという仕掛けだった。僕みたいな我儘な人間にはとてもつとまるところではない。

僕は九カ月と十日で、依願退職した。僕は出世を望むよりも自由を望んでいた。自由な仕事がどこかにないかと考えて、見習いの工具になろうと思つた。僕は工具募集広告を見て、アルプス・カメラの工場へ行ってみた。僕はラジオやテレビの組立を学生時代にさんざんやって

いたので、すぐ採用された。

そして最初はフラインダーの調節の仕事、次に研磨機の仕事、それから本工員になって、レンズのコーティングの部屋にまわった。工場の仕事は単純で、誰にだって出来る。カメラ工業は景気がよかったから、給料も案外よかった、ボーナスもよかった。

僕は年末のボーナスで中古のオートバイを買った。通勤の電車が無茶苦茶に混雑するから、もう電車などのお世話になるまいと思つて買った。朝の電車は人権を無視している。僕はなまけ者だけれども、自分の人権だけは大切に考えていた。だから伊吹まさ子の人権をも大切に考えていた。

一週間ばかり経つてから、僕は工場の帰りに稲垣次郎をさそつて、焼鳥屋でビールを飲んだ。稲垣は僕より一つ年下の二十六だが、二十四のときに結婚して、もう秋には父親になる予定だった。もっと正確にいうならば、(父親にならせて貰える予定)だった。つまり女房が母親になるから、それと同時に彼は自動的に父親になるのであつて、彼が自分の意志と努力とで以て父親になるわけではなかった。すべて女房のおかげだった。

「どんな気持だい」と僕はきいてみた。

「そりゃ君、何ともいえない気持だよ。つまり、何とい

うのかな、俺のあと継ぎだからな」と彼は言った。

「あと継ぎか。……何を継がせるんだい。君の、あぐらをかいた鼻のかたちか。それとも君の、酒好きな胃袋か」

「何とも言うがいい。君には父親の心境はわからないよ」

「解りたくないね」と僕は言った。「僕は結婚することにきめたけれども、子供は産まないつもりだ」

「え？ 結婚するのか」と稲垣は叫んだ。「伊吹まさ子か」

「もちろんだよ」

「ふむ……よく彼女は承知したね。伊吹まさ子に求婚した男を、僕は四人ぐらい知っているが、全部ことわられたんだ。なかにはずいぶん良い条件を持つて行ったやつも居るんだよ。新婚旅行は飛行機で北海道に行つて、阿寒湖と大雪山と登別温泉をまわつて帰るとかね。貯金があるから二十坪ぐらいの家を新築して彼女を迎えるという話もあった。もちろんみんな、生涯変らざる愛の誓いを立てたわけだが、それでも駄目だった。福田信太郎は一体どんな条件をもち出して彼女を口説き落したんだね」

僕は良い条件なぞ一つも持ち出さなかった。持ち出したくても、そんなものは何もなかった。むしろ悪い条件

ばかりだった。悪い条件を持ち出したのが却って良かったかも知れないのだ。

「僕たちはね、三年間の約束で結婚するんだよ。三年経って、もうお互いにたくさんだという気持ちだったら、文句なしに別れよう。しかし三年たったあとで、一人とも、もう少しいっしょに居たいと思うようだったら、一年ずつ一年ずつ約束を延ばして行こう。そういうことにきめたんだ。合理的だと思わないか」

稲垣次郎はながいあいだ黙って考えていた。彼は多分、自分の結婚生活と僕たちの約束とを比較していたらしい。それから僕にむかって、

「伊吹まさ子は、そんな馬鹿な条件で結婚を承諾したのかい？」と言った。

「もちろん、承諾したよ」

「そうか。可哀そうに……」と稲垣は言った。「あいつはよほど君が好きなんだね。しかし君は大学を出ているし、とても正式な奥さんになんか、してもらえないことも知っているんだ。だから、三年たったら君に棄てられることを覚悟で、たった三年でもいいから、君と一緒に暮して見たかったんだね。ひた向きな女ごころだ。可哀そうに。……それに引きかえ、君は悪いやつだ。女たらしだよ」

「冗談じゃないよ」と僕は言った。

「それは君、言いがかりと言うものだ。僕は伊吹まさ子を本当に愛しているんだよ。」

しかし、僕は誤解されることを恐れずに、正直に言うんだけれど、人間の愛情というものを君はどんな風に理解しているんだね。殊に愛情の永続性ということについて、君は確信のあることが言えるかね。君は自分の女房を、これからさき三十年もそれ以上も、変ることなく愛して行けるといふ自信があるのか。

男だって女だって、生きものだからね。三年たったら人間は変ると思うんだ。変る方があたりまえで、変らなかつたらおかしいよ。たとい神様のまえで誓いを立てて結婚したからって、お互いに嫌になることもあるよ。嫌になつてから、それでもまだ一緒に暮している夫婦なんて、悲劇だからね。僕は悲劇はいやなんだ。たった五十年か六十年の人生を、悲劇的に暮すという法はない。

結婚というものは、楽しい間だけ続ければいいんだ。三年のあいだにはいろいろな変動があるだろう。経済状態も社会状況も、思想的にも、職業的にも、変化はおこってくる。ほかに好きな人が出来たという場合もある。そういうたくさんの変化に応じて、生活のかたちも変つて行くのが当然じゃないか。世の中がどんなに変つても、二人の結婚生活だけは変らないという訳には行かないよ。戦争未亡人、引揚げ未亡人、戦災未亡人、そうい